

クレーマー教授の印象

加 藤 一 朗

アメリカ、ペンシルヴァニア大学の博物館長でシュメール学者のクレーマー S. N. Kramer 教授夫妻にお目にかかってから一年余にもなり、それも僅か3日間のおつきあいであつたので、教授の印象をあやまりつたえることをおそれる。しかしその3日間というもの、教授の講演の通訳と夫人が好むという寺院の案内とおひきうけして、文字通りクレーマー夫妻とともにあつたので、そのお人柄の幾分なりとつたえようとおもつて筆をとることとした。

さて昨年2月26日午後4時すぎ、京都大学の足利、有光両教授、わが国のシュメール学者中原教授とその3人の弟子達（山本茂、小野山節、吉川守の3君）と筆者とは、東京での講演をおえて西下するクレーマー夫妻の到着を京都駅のフォームでまっていた。特急車の最後尾からおりたたれた教授は、著書にのっている写真とはちがって眼鏡をかけてはいなかったが、眉のせまった鋭いまなざしの偉丈夫でただちにそれとわかった。夫人はいかにも大学教授夫人というにふさわしい小柄な知的な魅力にあふれる方であつた。モヘンジョダロ踏査の帰途日本にたちよられたとかでいずれも怪装をして居られた。

われわれはそのまま夫妻の宿舎にあてられた東山の細川家別邸におともした。旅装をとかれるまもなく、シュメール学者達の間には楔形文書のあれこれについてはてしない論義がかわされた。中原教授のもちだされた論点の一つは、*sub-lugal* をクレーマー教授は王の家来と読んで一般的な表現ととっているが、この場合の *lugal* はむしろ神で、語全体としては特定の職業（平時には農民で戦時には軍人となる人々）をさすのではないかということであつた。また吉川氏は *ama-ar-gi*（自由の意）の原義は「母のもとにかえる」ではなくて、*ama-ar* は *amar* すなわち「家畜の子」と読むべきではないかという問をもちだされた。理論よりも実証を重んじるクレーマー教授はこれらの質問にはすべて、「例証。例証。テキストを見ましょう」といって決して結論を急ごうとはされなかつた。しかし、未知の国日本の、それもおくまった古都京都で、これ程専門的な楔形文書の研究が進められていることを発見したことは教授にとって少なからざる驚異であつた

クレーマー教授の印象

らしく、中原教授達との間には、翌日からの講演会のあとでウルカギナ改革碑文に関するセミナーを開くことがその場で計画された。

歓迎のいみの晩さん会の後は、京大文学部長有賀教授をもまじえて自然懇親会の形となった。初め教授夫妻と有賀教授との間に宗教上の話が交わされていたが、若いシュメールの研究者を前において往時を追想されたのか、膝をつめあって東西に共通する学究生活上の困難という話におちていった。教授は結婚して子供もでき、学問上のめやすもついた頃母校ペンシルヴァニア大学の研究員としての契約期限がきれ収入の道を失ったこと、途方にくれつつも夫人の激励にささえられて研究をつづけたこと、そのうち偶然にもシカゴ大学に奉職することができたことなど、思い出をかたられた。そしていかにもアメリカ人らしく卒直に、シュメール学の分野でアメリカ人の学生を多勢育てても到底将来のポストを見つけてやれないので、すでに地位の安定している外国の学者をまねいて教える方が安心だともいわれた。またペンシルヴァニア大学に移られてからも、戦時中は思想的な問題から、恩師であり同僚であるペーベル教授が絶交されて、廊下ですれちがっても挨拶もされなかったというような苦しい経験もあったと語られた。教授が、「古代文化研究者は世界的にみてふえているようにおもうが、これは必ずしもよろこばしい傾向ではない」といわれたのに対して、誰かが、「それはえせ学者がまじるからか」とただしたところ、「そうではない。古代学をいくらやっても、ワールド・プローブレムの解決にはならないからだ」という答であった。

京大の講演会のテーマは

2月27日

Sumerian Literature : The World's Oldest Belles Letters.

2月28日

Education in Sumer : Man's First Schools.

3月1日

Sumerian Character and Personality : Drives, Motives and Values.

と予告されていた。しかし、初めの2日間は、スライドを用いて、かなり自由に話をすめられた。第1日目は、「100年前には全く知られていなかったが、先覚達の努力のおかげで今日ではきわめてよく知られている民族であるシュメール人の文明について語る」と前おきされて、まずメソポタミアの諸遺跡のスライド——ウァルカの「白い寺院」、ウルルのジグラトなど——を映されて、発掘された年代、発掘した人々について簡単に説

明された。次に楔形文字発達の図表にもとづいて、絵文字から楔形文字が形成されていく順序を説明された。第2回目は初め前日と同じ図表を用いて楔形文字発達の後期の段階について話されたあと、数学、植物学、医学、神話などに関する粘土板を映出されて、それからそれへと話を展開された。この間、楔形文字の発明者がシュメール人であることは疑ないとしても、最初の絵文字を残した民族はシュメール人ではなさそうであるというような見解をのべられたともあるが、「一般の聴衆」ということをたえず意識されて、粘土板の方が現在のノート類よりもスペースの利用という点で能率的であるとか、書記が1日か2日で書いたものを現在の学者は1ヶ月もかかって手写するとか、きわめて卑近な例をあげて興味をさそった。そして強調されたことは、一つの神話にしても、世界各地の博物館に眠っている破片の中から、再構成する苦心は、先覚達にとっても、教授自身にとっても大へんなものであったという点であった。とりわけ教授自身重要な寄与をされている「イナンナの他界降下」の神話については、特別の愛着をおもちらしく、これについては詳しくのべられた。この神話については、教授の編集・執筆した *Mythologies of the Ancient World*, 1961 の中の *Mythology of Sumer and Akkad* の章におなじく詳しくのべられているのでここには繰返さない。また粘土板の破片から神話その他を再構成するという方法は学問上の方法としては別にとりたてていうほどのことではないかも知れないが、にもかかわらず、このありきたりの方法の重要性が、実際にこの方法で貴重な成果をあげ、シュメール文学研究に新たな一頁をかき加えた先生の口を通して語られると、学問のきびしさに今更ながらうたれずには居られない。そして先生があくまでも学問をパブリックのものと考え、その前にはあくまでもけんきょで、「今日のシュメール学者は——名指すことができない先輩達の努力の結果を利用してもらいながら、ただ感謝のうちに頭をひくくたれるだけである。まもなく今日のシュメール学者達も世をさるであろう、そのときその一歩進めた成果は楔形文字研究の進歩という総合的な流の一部となるであろう」(S. N. Kramer, *History Begins at Sumer*, 1959 の序文中) とかいて居られるのを併せ考えるなら一層この感が深いであろう。「再度イスタンブールに筆写にでかけた」というような苦心はわれわれにとってはうらやましい苦心であるにしても。

もう一つ。聴講者の中からきかれたことばは、教授の英語が美しいということであった。上にあげたような先生の書物のどの頁をひらいても、文章は流麗で彫琢されて居り、且きわめて平易である。これに先生の声で魂をいれられたのであるから、きくものがこのような感銘をうけたということはむしろ当然かも知れない。海外への日本文学の

クレーマー教授の印象

すぐれた紹介者である D. キーン氏が、「日本文学の英訳者を育てる現実的な唯一の方法は、日本語を知っているアメリカ人をさがすことではなくて、美しい英文のかけるアメリカの学生に日本語を勉強してもらうことである」といっているが、このような意味でなら、クレーマー教授はシュメール文学の代弁者としてもっともふさわしいであろう。

講演の第3日目ではスライドは用いられなかった。お話の内容は先生が将来発表される筈の草稿の中からえられたようである。

まずシュメール文化を理解するためには社会・政治・経済・法制・宗教・技術・美術・文学の各方面からするアプローチがあるが、自分はめったにとりあげられたことのない心理学の面をとりあげてみたいと前おきして、愛・憎・恐という3箇のドライブ（教授の表現）の中から第一に愛の分析にかかる。この場合にも、シュメール語の「愛」という語の原義が「測量する」といういみであるところから、激情的、感覚的とか官能的とかいうような感情の種類程度をいみするのであろうというような思索も一応おこなわれるが、最も重要なことは、愛がテキスト、それも文学上のテキストではどう表現されているかということである。愛の中でも男女の愛はどうであったか。教授のあげる例に従ってみよう。

イナンナ（女神）とドゥムズィ（男神）との間の恋愛物語がある。筋はこうである、「天国で無心に歌い踊っているイナンナを見て、ドゥムズィはその手をとっていただく。彼女は秘密を母に知られまいとして、はなしてくれとたのむ。ドゥムズィは、広場で女の友人と時を費していたのだといって母の目をくらませとすすめる。月光のもとに二人が互いの愛にひたっているまに、ドゥムズィが、清らかな、あまい、みやびやかなベッドをしつらえる。一夜のたのしみののちに、ドゥムズィはイナンナと結婚することを約して、彼女の母につげる。イナンナは未来の花むこをたたえる。」この物語をつたえる粘土板には欠所もあり、また種々の異本の類もあるが、しかし、イナンナやドゥムズィの美しい独誦をつなぐと上のような推移がよみとられる。クレーマー先生にとっては、このような独誦の一つ一つの再構成そのものが、数十年にわたる血と汗の結晶であり、それだけに恐らく詩の響は一層美しく、このような努力をふまえているからこそ、シュメールの結婚も決してシェケル（この場合金銭の意）のみにもとづく実際的な契約ではないという確信をもたれるのである。すなわち上記「歴史はシュメールにはじまる」の著者として、絶えず人類最古の文学ととっくんでいるという意識から、最も古い愛をさぐるパイオニアとも自らをみなされ、またそれを愛とは何かというフィロゾフィーレンするよす

がにもされているとさえ思われた。しかし、どこまでも文献第一で、シュメール学に一頁を加えることを目標とし、決して結論をのべようとされなかったのはもちろんである。

つづいて教授は他の神々の間の愛、兄妹愛、友愛、神と人との間の愛、祖国に対する愛がシュメール文学の上では夫々いかなる表現をあたえているか例証された。更に憎悪・恐怖の問題にも立入られたのであるが、時間の関係上ことばをつくされず、最後にシュメール文化に特徴的と考えられる「敵対と優越」という心性についてのべられた。すなわちシュメール人は「最初の文学上の討論」(History Begins at Sumer, pp. 136 ff.) にみられるように、このんで夏と冬、家畜と穀物、鳥と魚、木と葦、銀と青銅、鍬と鋤、牧者と農夫といった対のものを、文学的に対立させて、夫々擬人的に自己の長所、相手の短所を誇張させて討論させることを好んだが、このようなことを好むシュメール人の心性に、和合よりも対立を、他との協力よりも他よりの優越をよるこぶ傾向をみられた訳である。そしてこのような傾向がシュメール都市国家の政治的な推移にも反映しているとみられる。「丁度古典時代のギリシアの諸ポリスがついに民族国家として統合されず、分裂・抗争をつづけて行くうちに滅んでいったのになら、シュメール諸国家は対立と優越をきそっているうちに滅んでいった。競争はたしかにエネルギーを伸長するためのよい刺戟であるが、競争ばかりで和合のない世界は所詮は滅亡する他ない」といわれ、「シュメールの神々の恵がみなさまのうえにあらんことを」ということばで講演をむすばれた。

この最後の、シュメール人のつよい「敵対意識と優越意識」という点はクレマー教授の持論の一つであるらしく、シカゴ大学におけるシンポジウム (City Invincible, Chicago, 1960 所載) の中でも主張されていることをあとで知った。

2月27、8両日の講演後にひらかれたセミナーには筆者は出席しなかった。予定通りウルカギナの改革碑文 (Cone B. C.) をテキストとして、細かい論義が行われたよし。多年文学文書を集中的に研究して来られた教授と、日頃経済文書に関心の深い京大のシュメール学者との間には貴重な知的交流のあったことは疑いない。

主に午前の時間をつかって、夫妻を桂離宮、醍醐の三宝院、金閣寺、大徳寺、龍安寺等に案内したが、桂離宮の建築には殊に感銘をふかくうけられたようであった。教授の専門外の「日本文化」について開眼されたといった様子で、「これは大したものだ。見なければわからない。実際に見なければわからない」を連発して居られた。

醍醐の三宝院の庭を拝観した折も、きざはしに腰をおろし、池の水にみいりながらし

あ と が き

ばらく動こうともされなかった。進行中の著作のことを考えておられたのか、モヘンジョダロの印象をまとめておられたのか。「こういうしずかな冥想の場所をもっている日本人からは深い思想もうまれよう」といっておられた。また寺院等で団体客とかちあうと、夫人はつとめてこれに加わって、案内人の説明に耳をかたむけられたが、先生はいつも一人はなれてものを考えて居られ、人気のない「立入禁止」(日本語のみの表示)の建物の廊をいったりきたりされているようなこともしばしばであった。夫人は「彼はどこにいてもあんな風です」と説明していた。

京都で最後に訪れたのは京都大学考古学陳列室であった。陳列品の中に中国の甲骨文字の実物を発見されたときは非常に驚いて、有光教授にほんものかどうかとたずねられ、そうだという返事をえても、なお半信半疑といった顔で、「写真ではいくらも見ているが、実物をみるのははじめてだ」と力をこめていっておられた。

(この小稿を草するにあたって中原与茂九郎教授の御教示をいただいたことを付記し、あわせて感謝の意を表したい。もちろん文責はすべて筆者にある。)

(筆者は関西大学助教授)

あ と が き

○活字印刷による本誌再発足以来第3号目(通巻第8号)を世におくる。64頁建の予定が編集部の手次第でまたもや増頁となり足利会長の容易ならぬ御高配を仰ぐこととなって申しわけがない。会員諸兄姉の御支援と共に編集部一同身のしまる思いがする。

○内容もいよいよ充実しつつある。前号予告のとおり、多彩且つ異色ある原稿をよせられた執筆者各位には感謝にたえない。編集企画の都合で羽田氏に無理なお願いをしたり、岩本氏に論評欄で御容赦願ったり、会員消息では前号と一部前後するなど、いずれも深くおわびしたい。

○会員諸氏中には最近学位を獲得された方がたがたくさんあり慶祝にたえないが、掲載する紙面もないのが残念である。

○次号(9号—本年末上梓)の準備もほぼ成り、10号は中原与茂九郎京大教授退官記念号とする予定でひろくシュメロロジスト、アッシリオロジストの御寄稿を願ひ、すでにいずれも内諾を得ている。これは本邦斯学界の一結集で、本邦における同方面の草創期から多年この学田を開拓されてきた同教授の記念号としてのみならず、いろいろな意味でも一時期を画するものと期待している。

○本号も印刷はあぼろん社社主伊藤武夫氏をわずらわした。深く謝意を表したい。〔編集部記〕